

第198回 日文研フォーラム



# 日印関係とインドにおける日本研究

## 宮沢賢治の菜食主義の思想

Indo-Japan Relations and Japanese Studies in India

Miyazawa Kenji's Vegetarianism



プラット・アブラハム・ジョージ

Pullattu Abraham GEORGE

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 片倉もとこ





● テーマ ●

# 日印関係とインドにおける日本研究

## 宮沢賢治の菜食主義の思想

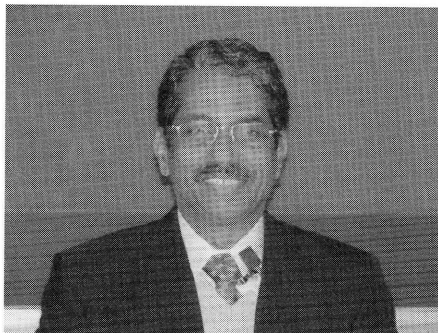
Indo-Japan Relations and Japanese Studies in India  
Miyazawa Kenji's Vegetarianism

● 発表者 ●

プラット・アブラハム・ジョージ  
Pullattu Abraham GEORGE

シャワハルラル・ネルー大学日本語学科 準教授  
Associate Professor, Jawaharlal Nehru University  
国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2007年1月16日 (火)

## 発表者紹介

---

プラット・アブラハム・ジョージ

Pullattu Abraham GEORGE

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

## 略 歴

1997年 5 月 Ph.D. (ジャワハルラル・ネルー大学)

1990年 9 月 ジャワハルラル・ネルー大学 日本語学科 助教授

1999年 9 月 ジャワハルラル・ネルー大学 日本語学科 準教授

2002年 9 月 「第12回宮沢賢治賞奨励賞」受賞

## 著書・論文等

*Enlightenment of Women and Social Change*, Northern Book Centre, New Delhi, 2006

*East Asian Literatures: An Interface with India* (ed.), Northern Book Centre, New Delhi, 2006

*Miyazawa Kenji's Ten Japanese Stories for Children* (十篇の宮沢賢治童話作品の英訳), Northern Book Centre, New Delhi, 2005

*Akasagangayilootu Oru Theevandiyatra* (宮沢賢治作品「銀河鉄道の夜」のマラヤラム語訳), Current Books, Kottayam, 2001

*Enlightenment of Women and Their Fall* (島崎藤村の「旧主人」及び「老嬢」の英訳), Books Plus, New Delhi, 2000

他多数

## はじめに

周知のとおり、今はグローバル化、ITそしてインターネットの時代である。世界は小さくなり、国と国の間の距離が短くなってきた。情報の流れが以前にはなかったほど急速になり、その把握が速い方は勝ち、手遅れの方は国際競争から取り除かれてしまうという危険性にさらされている。二つの国の間における関係も、自分が相手について把握している情報や相手の文化などについて持っている知識の量と質によって、深くなったり浅くなったりする。まず、相手国について正しい知識を持つことは何よりも必要であり、前提条件でもある。なぜなら、相手国の文化、社会、歴史などを正しく理解することによって、初めてそれらの国と自国との比較が可能となり、正しい判断をする知恵がわいてくるのである。固定観念や先入観に満ちた浅薄な知識は相手を軽蔑し、誤解するきつ掛けを生み出すだけではなく、相手との関係実態が破断させられてしまう結末を招くに違いない。ある国の文化について正しい知識を持つことによってはじめて私たちはその国について持っている先入観を捨てることができると思う。それだけではなく、お互いに尊敬し合って健全な二国間関係を築き上げるためにもそれが役立つのである。しかし、世界各国についてそれぞれ正しい知識を持つたりすることはどの国においても

不可能であろう。そこで普通はどうするかというと、実利主義的に考えるのである。何らかの形で自国にとって利益になる相手国について、その国の文化、価値観、歴史、外交政策などを研究すると共に、その国との間で行われる文化交流に比重を置き、情報交換をしたりして相互理解や関係を深めようとするのが当然で、それが普遍的な真実であると思う。つまり、国民レベルでの文化交流を強化して相互に信頼と友情に基づいた関係を築き上げない限り、永久に続く二国間関係の実現などはあり得ない。

今までの日印関係の歴史、あるいはインドにおける日本研究、若しくは日本におけるインド研究の歴史を見ると、「とつてもすばらしかった」といえる時期は一度もなかった。日本とインドは互いにより関心を持たないままで二十世紀を生き抜いた。両国間の親密な関係は互いに利益にならないと思ったから疎遠にしてしまったのかどうかはわからないが、過去のこととは過ぎ去ったこととして忘れた方がいいのではない。それはそれでよいと思う。しかし、今後の世界の動きを考えると、インドと日本がお互いに以前と変わらぬ無知と無関心のままでは、もはや居つづけられない。もし、今のままで二十一世紀をもやり抜こうと思つたらそれは両国の何れにとつても、掛け替えのない利益を逸することになるだろう。これにやつと気付いたのだろうか、日印両国の政府はこれからの日印関係をより積極的なものにし、新時代の要求に応えようとして「日印グローバル・

パートナーシップ」の構想を打ち出している。未だに揺らいでいる日印関係の基盤を安定させ、有意義な日印グローバル・パートナーシップを築き上げながら両国間の経済的戦略的協力を一層高めるためには、草の根レベルでの文化交流も必要となる。そこで、より親密になるべき将来の日印関係のあり方を見通しながら、今日までの日印関係、そしてインドにおける日本研究のことをまず検討してみたい。

### 古代から戦前までの日印関係

日本とインドは昔から仏教を通して深い文化関係を持っていたとよく言われる。インドで発祥し、中国・朝鮮経由で日本にも渡ってきた仏陀の教えこそは日印関係の絆であるという考え方は、以前から日印関係について論じるほとんど誰もが鼓吹してきたことである。この考え方は大変理想的なものに聞こえるが、これを裏付ける歴史的証拠があるかどうか私は疑問に思う。六世紀ごろ仏教の教えが日本に伝わってきたということは確かである。それを裏付ける歴史的文献は日本にも、中国にも朝鮮半島にも歴然として残っている。だが、古くから日本とインドは直接交流を持っていたかということになると、その証となるものは何一つとしてない。もちろん古の日本人は、釈迦の生まれた聖

地として、また西方の極楽として昔の「天竺」を敬っていたかもしれない。しかし、当時のインド人にとっては、日本についてわかるすが何もなかった。おそらく、日本という国の存在さえ知らなかったのではないか。古代にインドから中国に渡ったインド人僧侶たちの何人かが日本にも渡っていることは確実視されているが、その中でインドへ再び帰って来た者は一人もいなかった。だから、古代インド人は中国についてかなりの知識を持っていたものの、和人や大和の国についてなにも知らなかったのである。人と人との間の交流どころか、情報の間接的なやり取りさえなかったはずだ。逆に、中国、朝鮮經由でわたってきた仏教とともにインドの説話物語などが日本に入ってきたので、当時の日本人は間接的にインド文化にかなり触れる機会があったのだろう。そして、インド人が日本について聞くことになったのはたぶん明治時代に入ってからではないかと思う。

明治・大正時代になると日本に興味を持つインド人が何人か登場してきた。日露戦争で西洋の大国ロシアを負かした日本は多くのインド人のアイドルとなった。日本のめざましい勝利は当時の植民地支配国イギリスからの独立を夢見ていた多くのインド人に希望と刺激を与えた。中でも、アジア初のノーベル文学賞受賞者タゴール（一八六一—一九四一）が日本人の勤勉さ、日本国の勇ましさに非常に感動した。彼は国民に日本や日

本人に学べと呼びかけ、日本・日本人をインド人のロール・モデルにしようとした。タゴールはまた、日本の思想家であつた岡倉天心（一八六二―一九一三）とも親しい関係を持っていた。岡倉天心は一九〇二年にインドを訪れているが、タゴールも大正・昭和期にわたつて五回も日本を訪れたことがある。二人とも「アジア的価値観」を高く評価し、アジアの発展と世界平和の維持を希っていた。しかし時代が変わつて昭和期に入ると、日本は次第に帝国主義的な行動をとるようになったので、タゴールは日本の行動を激しく非難し、今までロール・モデルとしてみてきた日本から遠ざかるようになった。日本は次第に太平洋戦争に向つて突き進んで行く結末となるのだが、インドもやがて自由・独立運動の波にのめり込んでしまい、お互いに無関心の一時期を送ることになった。もちろん、第二次世界大戦中、ドイツ経由で日本に渡つてきたスバース・チャンドラ・ボース（一八九七―一九四五）をはじめ数人のインド人の自由運動指導者たちが日本の当時の軍事政権の支援を受けて、インドを独立させようと努めたこともよく知られている。しかし、当時の日本の軍事政権によるボースらへの支援及び対インド戦略の作意は、インドの独立であつたのか、または敵国であつたイギリスの勢力を退けて日本帝国の版図をさらに広げることであつたのか、その真相がつかみにくいので評価の対象外にしておきたい。

## 戦後の日印関係

インドは戦後の日本と早くから関係の正常化を図った国のひとつである。独立インドの初代首相ジャワハルラール・ネルー（一八八九～一九六四）の主導のもとに当時のインドは、民主主義と平等性を尊重しながら新しい国づくりに励んでいた戦後の日本の榮譽を維持できるよう、国際社会において日本にふさわしい地位を与える必要性を強調した。そして一九五一年のサンフランシスコ対日講話会議への参加を拒んだインドは、翌一九五二年に日本と個別に平和条約を締結し日印外交を樹立した。実は、その四年前の極東国際軍事裁判（一九四六年五月三日～一九四八年一月一二日）ではインド代表のラダ・ビノード・パール判事が日本の被告人たちの無罪を主張して、判決に全面的に反対する少数意見書を提出している。世界全体が敗戦した日本をひどく非難し、高い賠償金を求めていた当時としては、インド政府が日本政府に賠償金の要求を一切しなかったことや、インド国民の日本国民に対する友好と善意の現われであったパール判事の判断は、当時の日本人のインド観を覆す大きな出来事であったと思う。また、それに先立ってネルー首相が一九四九年に一頭の象（インディラ）を日本の子供達への贈り物として上野動物園に届けている。敗戦のショックや苦しみからまだ完全に立ち直っていなかつ



た日本国民に、インドのこのような親しみに満ちたジェスチャーが慰めと希望を与えたに違いない。その結果かもしれないが、相互の関心も高まり、一九五〇年代の後半になると日印の関係はかつてないほどの勢いを発揮し始めたのである。そして、一九五七年に両国の首相（ネルー首相と岸信介首相）がお互いの国を公式訪問し、同年に「日印文化協定」が締結された。戦禍の中から蘇った日本はその時までには戦前のレベルを越える経済成長を達成し、発展途上国に政府開発援助（ODA）や円借款を供与するまでに至っていた。実は、インドは一九五八年から日本からのODAを受けている。日本のODAを初めてもらった外国はインドであるということ自体が、一九五〇年代の日印関係がいかに良好な方向に進んでいたのかを裏付けてくれる。そして、一九八六年からインドは、日本の最大のODAを供与される国となっている。

要するに、戦後の十数年はインドと日本の関係が一番好ましい方向に進んだ時代であったといえる。しかし、日印間のこのような友好関係は長く続かなかった。一九六〇年頃になると世界は冷戦の波に揺られ始め、日本は完全にアメリカの傘下に入って自国内の経済発展だけに夢中になった一方、インドは非同盟主義を強調して民主主義の普及、植民地制度の破壊、人種差別の撲滅などを呼びかけながら自給自足の国づくりに励んだ。そして、非同盟主義を強調しながらも少々ソ連寄りになってしまったインドの振る舞い

を日本が疑いの目で見えるようになった。結局、二国間の信頼は冷戦の高潮に吞まれてしまい、お互いに無関心状態の十数年を送ることになってしまった。もちろん、そういう状況の中でも、一九八〇年代にスズキ自動車をはじめ、いくつかの自動車関係の日本企業がインドに合弁会社の形で進出してきたが、それは日本の他の外国との貿易、または合弁企業の規模に比較すると、大海の一滴に過ぎなかったと思う。そして、何と言ってもこの時期の出来事として忘れてならないことは、一九九一年にインドは外貨準備高がなくなり深刻な経済危機に直面していたとき、日本が直ちに適切な経済的支援を実施して、インドを全面的経済破滅から救い上げたことである。逆境の友は真の友というが、当時の日本の親しみに満ちた行動によってインドは経済危機を乗り越え、後の経済自由化と市場開放の画期的な政策を打ち出し、インド経済の抜本的な改革に着手できたのである。

### 現在の日印関係

インド政府が二十世紀の終わり頃（一九九二年）から打ち出した上述の経済自由化と市場開放政策の結果、インド経済は大規模な成長を見せ始め、多くの外国企業がインド

に進出して投資するようになった。それに加えて、現在のIT革命とその世界的な普及によってインドは情報技術主要国の一つとして、換言すればソフトウェアの大国として認められ、世界中から注目を浴びるようになった。その上に、今までのような欧米中心の経済・貿易政策だけでは二十一世紀のグローバル化の時代を通り抜けられないことに気付いたインド政府は、「ルック・イースト」(Look East)の政策を打ち出して、東南アジアや東アジアの国々へ以前には無かった関心を持つようになった。その結果、一九八〇年代の終わり頃まで横這い状態であった日印関係も次第に改善の方向に向き始めた。以後、特に製造企業、貿易などの分野では著しい成長がみられるようになった。日本の通産省の統計によると、二〇〇五年度の日本からインドへの直接投資は前年度に比べて二倍も増加している。それに、現在およそ三五〇の日本企業の支社がインドに進出しているとのことである。近年、政治や経済の分野で多くの要人がそれぞれお互いの国を訪れ、経済、政治、安全保障戦略、そして文化の面でさらに良い日印関係を築き上げる下敷きを築きつつある。たとえば、二〇〇〇年の八月に当時の森首相がインドを公式訪問したとき「二十一世紀における日印グローバル・パートナーシップ」についてインドのバージパイ首相と首脳会談を行い、共同声明を発表した。さらに五年たった二〇〇五年の四月には、小泉首相がインドを公式訪問して、インドのマンモハン・シン首相と

首脳会談を行った。この会談で、両首脳は「二国間関係の着実な発展」を強調し、「お互いに関心のある地域問題、国際問題」に協力し合って取り組むことを協議した。そして、両首脳は「アジア新時代における日印パートナーシップ」に調印したのも見逃してはならない出来事である。このグローバル・パートナーシップを強化させ、期待される成果を得る目的で次の「8項目の取り組み」(Eight Fold Initiative)を定め、それを実現するために努力することを決定した。

## 8 項目の取り組み

- ① 対話の高度化と交流の強化
- ② 総括的な経済的関与の強化
- ③ 安全保障対話・協力の強化
- ④ 科学・技術面でのイニシアティブ
- ⑤ 文化・学術面での交流及び人と人との間（両国民間）の交流の強化
- ⑥ アジア新時代開幕に当たっての協力
- ⑦ 国連及びその他の国際組織における日印協力
- ⑧ グローバル的な挑戦に対応するための協力

「8項目の取り組み」のいずれの項目も健全な二国間関係を築き上げるために必要であることは言うまでもない。中でも、第5項目の「文化・学術面での交流及び人と人の間の交流の強化」は、二国間関係のすべての基盤を成すものであると主張したい。むしろこの項目を第1項目にして扱い、互いの文化、習慣、価値観、世界観、ものの考え方などを相互に理解してもらわない限り、深みのある日印関係は不可能であろう。日印両国は、日印文化協定締結五〇周年に当たる今年（二〇〇七年）を「日印交流年」として指定し、それぞれの国でさまざまなイベントと記念事業を行うことを計画している。しかし、こうした他国の文化・異文化を紹介するイベントや行事は大会の一部のエリートだけを対象に留まってしまつては期待する効果は得られない。こういうイベントを全国津々浦々に住んでいる、社会の中心勢力である民衆にまで届き渡るような方法で紹介してほしい。

要するに、二十一世紀に入つてインドと日本はようやくアジアの責任ある二つの国として積極的に手を組むようになったような気がする。そして、日印関係が徐々に望ましい方向に進展している今日、インドにおける日本研究の実態を探ってみることは有意義であると思うので、以下に簡単に触れておく。

## インドにおける日本研究

日印関係の歴史と同じく、インドにおけるこれまでの日本研究の成果もあまり賞賛すべきものではない。ここでまず、どうして今インドで日本研究が必要なのかという疑問が出てくるかもしれない。それにはいろいろな理由を取り上げて答えることができると思う。例えば、次のようなものである。

1、インド人が日本について持っている知識は極めて少ない。高いレベルの教養が身につけているインド人でさえ日本について誤った先入観を持っている。

2、日本人の価値観やものの考え方はどんなものか、社会の構造や家族制度はどうなっているか、日本人の食生活や宗教生活はどういうものか、現在のインド人には全然わからない。相手の心理が良くわかり、考え方、価値観、国民性などを正確に把握しない限り信頼と友好に基づいた二国間関係を築き上げることはできない。

3、かつての日本はインドの敵国でもなければこれといった友好関係を持つ国でもなかった。この事実がインド人の今までの日本観の根本をなしてきたと思う。しかし、「日印グローバル・パートナーシップ」の新時代においては、もはやこのような無知と無関心の態度では期待する成果をもたらさない。

4、人と人の間での交流は、すべての二国間関係の決め手であるに違いない。このレベルでの交流を促すものは相手への関心と思いやりに他ならない。しかし、この関心や思いやりは相手について自分が持っている知識から生まれてくるのだということに気づいている人は少ない。つまり、インド人にとって、日本研究は日本に対する知識を生み出してくれる手段である。

ここで、インドにおける日本研究を「インドにおける日本の地域研究」「インドにおける日本語教育」および「インドにおける日本文化・文学研究」と三つに分けて考える必要がある。

### インドにおける日本の地域研究

インドにおける日本の地域研究は実は半世紀ぐらいの歴史を持っている。一九五五年に設立された Indian School of International Studies の一つの研究学科として「東アジア研究学科」が設けられ、中国、日本及び朝鮮研究を開始したのがその始まりである。この研究学科は後にネルー大学の国際関係学部の一つの学科となったが、今も日本地域研

究を活発に行っている。一九六九年の十月に日本とインドは「インドにおける日本研究振興のための覚書」(Memorandum on Promotion of Japanese Studies in India)に調印した。その第一歩として、同年にデリー大学で新たに「東アジア研究学科」が開設され、日本の地域研究と日本語教育が同時に発足した。インドで現在日本関係の地域研究を行っている所はデリーにあるこの二つの大学だけで、研究者の数も両手の指で数えられるほど少ない。主な研究テーマとしては、日本の国際関係と外交、経済と貿易、日本的経営、歴史、政治などが取り上げられている。要するに、現在インドで行われている日本関係の地域研究の規模は非常に小さくて、時代の要求に応えられなくなっていることは一目瞭然である。「アジア新時代」における日本の地域研究の意義はいかに大きいかということを認識して、インド各地の大学や研究機関にその研究分野を設けることがインド政府の緊急政策課題になってほしいと願っている。

### インドにおける日本語教育

インドにおける日本語教育の歴史は地域研究と比べると長いが、その道程を遡って見ると、今からおよそ九〇年前にインドで日本語講座が開講されていたことがわかる。そ



れは、前に触れたタゴールが自らの設立したウィシュワー・バラティー大学（タゴール大学）で一九二〇年頃から日本語教師を日本から招き入れて日本語教育の口火を切ったことに由来する。この講座は数年間続いたが、昭和期に入って日本が帝国主義的外政を強行し戦争への道を進むにつれて、タゴール大学の日本語講座も中絶せざるを得なくなった。これ以後、インドで本格的な日本語教育が始まったのは一九五七年の「日印文化協定」の締結後からである。翌一九五八年には在インド日本大使館がニューデリーとコルカタ（Kolkata）で日本語講座を開講している。デリー大学では一九六九年に、ネルー大学では一九七三年に日本語のコースが次々と開講された。戦前に中止されてしまったタゴール大学の日本語コースも一九五四年に再開された。インドの商業都市であるムンバイ（Mumbai）では、一九五〇年代の後半に日本語講座が開かれ、隣のプネ（Pune）では、地元の印日会（Indo-Japan Society）が一九七一年に最初の日本語講座を開設した。今、プネ市はインドで日本語教育が一番盛に行われる場所となっている。二十世紀の第四四半期になると、日印経済関係がより親密になってインド市場への日本企業の進出が増えるに伴って日本語運用能力が身に付いた人材が益々求められるようになってきた。しかし、需要が多過ぎて、既存の日本語教育機関から出る卒業生だけではその需要に応えられなくなった。したがって、一九八〇年代までデリー、コルカタ、そしてプネ市中

心に行われてきた日本語教育はインド各地へ広がり、現在、インド全国の約七〇箇所では日本語教育が行われるようになったのである。それに、教師数もおよそ二五〇名以上になり、学習者数は常時八〇〇〇名を上回るようになった。

実は、今までインドで行われてきた日本語教育は高等教育レベルでの日本語教育で、小・中等レベルでの日本語教育はほとんど無視されていた。タゴール大学の付属学校だけは例外で、以前から選択科目として日本語を導入している。二〇〇五年四月にインドで行われた日印首脳会談で、小泉前首相とマンモハン・シン首相がインドの学校にも選択科目として日本語を導入することを協議し、インドの日本語学習者の数を二〇一〇年までに三〇〇〇〇人までに引き上げることに同意した。その結果、二〇〇六年の四月からインドの Central Board of Secondary Education (CBSE)、中央中等教育委員会) 運営の学校で日本語を選択できる外国語科目として導入した。当初は第六学年から第八学年を対象にしているが、徐々に上の学年へ広げていく予定である。教師の不足、適当なカリキュラムの開発と教材の作成などは大きな問題であるが、インドの中央中等教育委員会 (CBSE)、在インド日本大使館、日本国際交流基金、MOSAI (Mombusho Scholars Association of India)、インド日本語教師会 (JALTAI) などインドにおける日

本語教育に直接携わっている両政府機関、教育機関、教師会及び非営利組織が共にこれらの問題を乗り越える措置をいろいろ講じている段階である。インドの小・中等教育への日本語教育の導入は、これからのインドにおける日本語教育の推進に大きな弾みを付けるに違いない。

### インドにおける日本文化・文学の研究

現在インドで日本の文化・文学の研究が行われている所は、日本の地域研究と並んで、デリーにある二つの大学、つまりネルー大学とデリー大学だけである。ネルー大学の語学部の日本語学科で現在教員と研究生を合わせて約一二人の日本研究者が日本の文学、社会、文化などを研究している。また、デリー大学では五、六人の文学・文化の研究者がいる。主な研究テーマは古典文学、説話文学、物語文学、明治文学、仏教思想などで、夏目漱石、森鷗外、樋口一葉、島崎藤村、宮沢賢治、三島由紀夫、川端康成、遠藤周作、芥川龍之介などの作家や彼らの作品および今昔物語などのような古代文学の研究をおこなっている。中には、日本の文学作品をインドの公用語に翻訳して出版している研究者もいる。

参考までに、インドの首都ニューデリーにあるネルー大学とオールドデリーにあるデリー大学における日本語教育と日本研究の内容について簡単に記述しておく。

### デリー大学

実は、インドではじめて公的に日本研究専攻課程と日本語コースを同時にスタートさせたのはこの大学である（一九六九年）。デリー大学の日本語講座と日本研究学科は Department of East Asian Studies（東アジア研究学部）に設けられているが、日本研究では日本の経済、歴史、外交と政治などの修士課程（M.A.）、哲学修士課程（M.Phil.）、M.A.のあと大学によって一年か二年のコース、そして博士課程がある一方で、日本語コースには二年間の修士課程（M.A. in Japanese）および幾つかのディプロマ（資格）コースがある。

デリー大学はごく最近まで日本研究だけに主眼をおき、日本研究学科に入学する学生には日本語の運用能力が義務付けられてきた。それに、日本語教育としては、ディプロマ・コースやパートタイム・コースしかなかったが、九年前から日本語研究にも主眼をおくようになり、言語学、日本文学、漢文と古典語などの学習が中心となる日本語の修士課程が新設された。現在、日本研究課程では十数人の大学院生が専攻しているのに対

表1: デリー大学の日本研究・日本語コース

フルタイム	パートタイム
インテンシブ・ディプロマ・コース（一年：五〇〇時間）	ディプロマ・コース（二年：五〇〇時間）
上級インテンシブ・ディプロマ・コース（一年：三六〇時間）	上級ディプロマ・コース（二年）
日本語の修士課程 (M.A. in Japanese) (二年)	
日本研究哲学修士課程 (M. Phil) (一年)	
日本研究博士課程 (Ph.D.) (三年)	

して、日本語コースでは、全コースを合わせて常時一〇〇名以上の学習者がいる。

### ＜ネルー大学＞

一九六九年に創立されたネルー大学は最初からインドにおける高等教育のメッカとして知られ、デリー大学と異なり、「日本地域研究学科」と「日本語学科」はそれぞれ「国際関係学部」と「語学部」の、違う学部に属している。国際関係学部の日本地域研究学科の研究生は学際的な連係として、選択科目に初級日本語コースを学習しなければならないが、語学部の日本語学科の同研究生向けの特別講座を受けているのが現状である。

ネルー大学の語学部のひとつの研究センターである日本語学科（正式名は、「日本語、朝鮮語と東北アジア諸国語研究科」Centre for Japanese, Korean and North East Asian Studies）は、国際関係学部の日本地域研究学科と違って大規模なセンターで、日本語、翻訳と通訳（和英・英和）、日本文学と芸術、日本社会と教養、比較言語学などの教育や研究が活発に行われている。このセンターの日本語講座は一九七三年に一年間のフル・タイムのディプロマ・コースとしてスタートを切ったのだが、翌一九七四年には五年間で学士と修士課程が修了できる「五カ年総合課程」に格上げされて大人気を呼び、一九八二年に博士課程も新設されて現在に至っている。インドにおける日本語教育において、同学科は、学士課程から博士課程までの高等日本語教育を提供しているインド唯一のセンターでもある。

表2：ネルー大学における日本語学科と日本地域研究科の履修内容

日本語学科（語学部）	日本地域研究科（国際関係学部）
<p>修士課程（三年のコース、週に二〇時間、約九〇名）</p> <p>主なコース：1、仮名、漢字、テキスト 2、会話、文法、作文 3、翻訳・通訳 4、日本文学史 5、日本の文化史</p> <p>修士課程（二年のコース、週に一六時間、約二五名）</p> <p>主なコース：1、テキスト（新聞紙、小説、評論、エッセイ、文学作品など） 2、翻訳・通訳（和英・英和） 3、現代日本語の用法（要約、手紙の書き方、論文の書き方、日本事情、ことわざ、慣用句、四字熟語、同音異義語、誤りやすい言葉など） 4、日本の歴史（教養文化史） 5、卒業論文（課題は学生に選択される）</p> <p>博士課程（M. phil. と PhD）前期二年、後期三年、六名）</p> <p>主なコース：比較言語学、比較文学・日本文学、日本の社会や文化などに関するコースと Mphil 論文と PhD 論文。</p>	<p>博士課程（五年（M.Phil 二年、PhD 三年）九名）</p> <p>主なコース：日本の地域研究関連科目（日本経済、政治、外交、歴史など） 哲学修士（M.Phil）論文 博士（PhD）論文</p>

## インドにおけるに日本地域研究・日本語教育の普及を妨げる原因

インドにおける日本地域研究・日本語教育の普及を妨げる主な原因には次のようなものが指摘される。

1、まず、インド政府の外国語教育と地域研究政策、それらの分野を専攻する学習者・研究者に対する待遇の不備を最大原因としてあげられると思う。

2、高等教育の段階では、近年日本語教育と日本研究が注目されるようになったものの、予算不足や優先順位の変更のため停滞状態が続く。

3、また、欧米やアジアの諸国のやり方と違って、インド政府は外国語の専門家や地域研究の専門家を外交官、外交関係の仕事などに任命することは減多にない。外交官向けの国家公務員試験には国連の公用語以外の外国語は選択科目として認められていないし、せっかく苦勞して外国語をマスターしても観光案内、通訳とか翻訳といった仕事しかないということを知っている学習者は、一生をかけての外国語研究などを好まないものである。

4、指導的地位を目指す野心深いインド人にとって、語学とは社会的地位をもたらしてはくれないごく平凡な学問である。故に、日本語を含む外国語の勉強を自ら進んで選



扱するインド人は以前から極めて少なかった。しかし最近では、外国語を学べば給料の高い仕事に就くことができるので、実利主義的な志向を持つインド人学生が競って日本語などの外国語を学ぶようになった。しかし、少しでも日本語ができるととても給料の高い仕事に就けるということから、多少とも日本語能力が身に付くとすぐ退学して実務に就く人が多い。従って、日本研究を続ける学習者の数は依然として増加しない。

このような状態の中でインド人の対日本理解を深めることは簡単ではない。日本語を勉強しただけで、学習者自身の日本人や日本に対する理解が深まってくるとはいえないし、自ら日印関係を強化する橋渡しになれるともいえない。インドに今最も必要なのは、これからの日印関係の重要性を十分に認識し、積極的に日本研究に全力を尽くす日本研究者である。日本学の実証的な研究成果が一般大衆の間に広がり伝わることによってしかインド人の対日本理解を深めることはできないと私は深く信じている。そのために、私は日本文学の研究をしているのである。私の努力によってインド人の日本人理解を少しでも深め、日本人観を変えることができるれば幸いと思つて、日本の文学作品の翻訳もいろいろやっている。現在私は、宮沢賢治の作品に見られる東洋思想、つまり

仏教・インド思想とはどんなものであるのかの研究を続けている。賢治の『ビヂテリアン大祭』という作品にどんな東洋的・インド的思想があるのか、ここでその作品内の素食主義者の分類だけを取り上げて、現代インドの素食主義者の種類と比較してみたいと思う。

### 宮沢賢治の素食主義の思想

宮沢賢治の素食主義の思想を形成したものには主に二つの考え方が絡み合っている。一つは、宗教的な考え方であるが、賢治は熱心な仏教徒で、特に法華経の教えに導かれていた人だから、生き物に対する輪廻転生の概念が彼の食生活に対する思考を形成する主な役割を果たしたに違いない。この地球上のすべての生き物は親子・兄弟であるという生まれ変わりの概念に基づく宗教的な考えと、生き物に対する慈悲の概念が彼の思想に顕現している。もう一つは、科学的な観点から食生活を評価する彼の知恵で、まず肉食は菜食に比べて高価につくという考え方も潜んでいる。貧しい人々にとっては、肉食はなかなかできないことで、それに、肉食はおいしいが恐ろしい病魔をもたらすだけでなく、人間の野獸的な本能を奮い立たせ、社会の平和や秩序を乱す原因になるという考

え方もある。言い換えれば、菜食によって人は穏やかな性質になる一方、貧しい人でも食べていけるという考え方が主流であるといえる。賢治のいくつかの作品から菜食主義の思想が読み取られるが、それが一番顕現されているのが『ビヂテリアン大祭』という作品である。

『ビヂテリアン大祭』では賢治が菜食主義の考え方を宗教的観点と科学的観点という二つの観点に基づいて分析し、解釈していることは上述のとおりである。作品中、菜食主義に反対する異教徒の人、つまり肉食を主流とする「肉食者」は、まずマルサス（イギリスの経済学者ロバート・マルサス Robert Malthus 一七六六—一八三四）の『人口論』を持ち出して肉食主義を擁護し、人類にとって肉食はいかに重要なものであるかを説得しようとしている。人口の増加に対して、農業ができる土地は相対的に増えないのでどうしても肉食に頼るしかないとの主張である。また、人間には草食動物の臼歯きうしも肉食動物の犬歯もあるので、人間は雑食（混食）をするべき動物であると肉食主義者がさらに主張し続ける。地質学者で農民の惨めな生活ぶりを見ていた賢治の中に潜んでいる科学者の魂がこうした主張の中に姿を見せているのは一目瞭然である。この作品における賢治の考え方を菜食主義の産屋とでも言えるインドにおける菜食主義の現状に照らし合わせて、作品内に見られる東洋思想を浮き彫りにしたいのが私の研究の本来の狙いである。

## 『ビヂテリアン大祭』のプロットの設定

『ビヂテリアン大祭』のストーリーは北米のニューファウンドランドのヒルティ村で、世界中から集まった菜食主義者と非菜食主義者、つまり菜食主張者と肉食（混食）主張者の間で行われる討論の形で展開していく。参加者には日本からの代表、仏教信者である語り手「私」、中国代表の陳氏、トルコ人の代表およびアメリカ、カナダなど西洋の国々の代表がいる。おそらく、アメリカ人・欧米人はキリスト教を、日本代表は仏教を、中国代表は儒教と仏教を、そしてトルコ人は回教を代表しているようだ。菜食の賛成派と反対派が交代にそれぞれ理屈を述べ、討論が展開されて行き、終わりがちになると、今まで肉食主義を強調してきた反対派の全員が突然態度を引っくり返して菜食主義者になる決意を示すところで話が終る。肉食を飛ばう討論者たちは次々に科学的に根拠のある論理を持ち出して菜食主義者の信念を打ち砕こうとしているが、その裏には「科学者賢治」の面影が明らかに見える。しかし、同時に確固たる信仰心の持ち主でもあった賢治は、大自然の一員である人間が自然との一体化をはかるべき義務を課せられていると論じ、「菜食はみんなの心を平和にし互いに正しく愛し合うことができるのです」と、みんなに平和と幸せをもたらすものは「菜食主義」だけだとビヂテリアンの同盟者に言わ

せて菜食主義を肯定しているのである。

菜食主義を厳格に守っているインドのジャイナ教とヒンドゥー教の代表がどうして参加していないのか疑問に思われる。ところが、賢治が作品中三箇所、①「印度の聖者たちは實際ゆえなく草を刈り、花をふむことも戒めました」、②「印度の聖者たちは濾さない水は飲みません」、③「今日のビヂテリアンは実に印度の古の聖者たちよりも食物のある点について厳格である」とインドのことを記述していることから、この作品の執筆中の彼の脳裏にインドがあつたことは歴然たる事実に違いない。

### 賢治による菜食主義者の分類

賢治は『ビヂテリアン大祭』の中で菜食を厳密に守る菜食主義者を「菜食信者」と呼び、その精神として理論的に「同情派」と「予防派」の二つに分けている。また『一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録』（以降「大会見聞録」という似たような作品の中でもテーゼとして全く同じ分類を採用している。「同情派」の菜食主義者の考えでは、地球上のすべての動物は、人間もそれに含まれるが、命を惜しむものである。だから、人間が生き残るためにかつてに動物を殺して食べることは無慈悲な、情けないことであ

るとというのが彼らの主張である。つまり同情派の考え方の中には、仏教の精神と教義の核心をなす生き物に対する「慈悲」の思想が流れているのである。それに対して、「予防派」は肉類や魚など動物質を食べるとさまざまな病気に罹ってしまう可能性が高いので、動物に対する慈悲心のためではなく病氣予防のために動物質を避けるという考えを持っている。近年、欧米など先進国やキリスト教圏の国々にも菜食者の数が増えているが、彼らのほとんどはこのグループに入ると思われる。

また、この「同情派」と「予防派」は菜食の具体的な実施方法、つまり食料品の選択に基づいてさらに三つのグループに分けられている。「大会見聞録」では、Actの方法として「絶対派」「折衷派」および「大乘派」と分類されているが、この作品でもまったく同じ分類をしている。第一グループは「動物質のものは一切食べない」人々、第二グループは「チーズ、バター、卵などは、生き物を殺さないで食べてもよい」と考える人々、第三グループは、いくら生き物を殺さないとしても、人間もこの世の中にいる動物の一つで、多くの命のために一つの命を入用せざるを得ないというとき動物を殺してもいいと思う人々である。賢治のこの分け方は非常に現実的で、われわれの周りにいる菜食主義者を調べてみれば、ほとんどがこの三つのグループの何れかに属していることが分かるだろう。しかし、インドにおける菜食主義の現状を見るとさらに複雑な要

素が絡み合っていることが分かってくる。

### インドにおける菜食主義の現状

インドは東洋におけるさまざまな宗教、哲学及び思想の発祥地で、古代から菜食主義の食生活が広がった国の一つであると考えられる。菜食主義はおよそ四〇〇〇年も前からインド亜大陸に定着していたという見方もある。そして、世界の菜食主義者の約七〇%以上の人が現在インドに住んでいると言われる。最近の調査によると、現在、インド人の四〇%は純粋な菜食主義者であると推定されている（二〇〇六年八月、Hindu-CNN-IBN 調査）。アヒンサー（非殺生）、非暴力など宗教に基づいた概念がその主な理由とされている。それに、ヒンドゥー教がカルマ（業）による因果応報の悪影響をなるべく少なくするために肉食を避け、菜食にこだわったほうがいいと教えてきたことも大きな影響を及ぼしているに違いない。近年、数多くの研究者や学者による研究の結果、ヴェーダ時代にインドに住んでいた人々はおそらく肉をよく食べていた可能性が高いという説が出ているが、ヴェーダ時代以降になると、動物質の食べ物が一種のタブーとなつてインド人の食卓から消えていったことは確かである。およそ二千年前に書かれたタ

ミール語の有名な聖典「ティルクラル」(Thirukural)によると、「情感を捨てた、知覚力のある人間は命に見捨てられた肉を食物にしない。自分の肉体を太らせるために動物の肉を食べる人はどうやって同情(哀れみ)を持てるのだろうか」("Perceptive souls who have abandoned passion will not feed on flesh abandoned by life. How can he practice true compassion, he who eats the flesh of an animal to fatten his own flesh?" Thirukural, Chapter 26: Abstaining from Meat)と、肉食をひどく批判している。

仏教より数百年前に生まれた「ジャイナ教」の教えの中心となったものは「生き物を殺すな」という「殺生禁止」の戒めであった。つまり、ジャイナ教では生き物を殺すことは「罪」だと考えられ、信者に生水を濾して飲むこと、呼吸によって空気中の微生物がたたくさんなくなってしまうので口にマスクを取り付けて呼吸すること、着物が汚れて洗濯するとたたくさんの命がたたき殺されるので着る物を一切捨てることなどと、信者に実生活上なかなか実行できない戒律が義務付けられた。そのため、このような厳しい戒律を守りかねた信者たちは以前と変わらない食生活や生き方を続けてきたのだろう。そこへ生き物に対する「慈悲」の精神を教義とする仏教が現れ、輪廻転生や因果応報に基づく哲学が広まるに連れて仏教徒の数が徐々に増加してきた。しかし、仏教は生き物を殺してはいけないという戒律を掲げ、菜食主義を強調しながらも信者が肉を食べること



を厳禁しなかった。自分が殺生さえしていなければ大丈夫だという考えだった。

このように広がっていく仏教の勢力に歯止めをかける形で「ヒンドゥー教」が甦って出現し、「カルマ」および「生まれ変わり」の思想を持ち出した。人は現世の「行い」つまり「カルマ」によって、来世に再び別の生き物に生まれ変わるので、身近にいる生き物は自分の親、兄弟姉妹、子供、夫、妻または親戚であるかもしれないので、生き物を決して殺してはいけない。また、多神教のヒンドゥー教は命のあるものにも命のないものにも「神」が在ると教え、生き物を殺害するのを「罪」と見なし、殺生を最小限に押し止めようとした。さらに、ヴェーダ時代以降になると、職業に基づく「カースト制度」が成立され、最上位のカーストに当たる聖職者・司祭階層の「ブラーモン」の間では動物の肉と血は「魂」の宿る体を汚すものとして見られ始め、次第にはかの上位カーストの間にもこの考えが染み込んで定着するようになった。それに、数多くの動物たちが次第に神々の乗り物として崇められたり、神聖な力を持つ生き物として崇拜されたりするようにもなった。たとえば、牛、蛇、ねずみ、孔雀、象、猿などは聖なる生き物で、猿や蛇が安置されている寺や礼拝堂もたくさん作られるようになった。そこで本格的な「肉食主義」が始まったのではないかと思われる。

## インドにおける菜食主義者の分類

賢治は菜食主義者を理論的に「同情派」と「予防派」の二つに分類しているが、インドの菜食主義者は主に三つの派に分けることができる。まず第一は「宗教派」、つまり「生活派」で、インドにおける菜食主義者の多くはこの派に属し、賢治も言っているように彼らを「菜食信者」と呼んだほうがむしろ正確であるかもしれない。「宗教派」の菜食者のほとんどはヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教などの信者で、彼らは生まれてから死ぬまで肉、魚そして卵を一切食べない純粋な菜食主義者である。このグループの人々は「カルマと生まれ変わり」の概念を深く信じ、生き物を殺すのは罪だと考えているのも当然のことである。また、生き物を崇拜したり、食べ物を捧げて神々を喜ばせようとしたりする人もたくさんいるこのグループは、十億人以上もいるインド人のうち、少なくとも約二割を占めているのではないかと思う。

第二は賢治も言っている「同情派」、つまりいわゆる「動物愛情派」で、各宗教からの信者、社会の各階層からの人々が入っているグループである。彼らは自ら肉、魚など動物質の料理を一切食べないし、人間が生き物を勝手に虐殺したり殺害したりしていることに対して猛烈な反対運動も起こしている。最近この派の影響力は数とともに急増し、

インドで野良犬を殺すことさえ法律上禁じられるようになってきた。確かに、彼らの考え方の裏には、仏教の精神である「慈悲」、ヒンドゥー教の精神である「カルマと生まれ変わり」、キリスト教の精神である「愛と哀れみ」、そして宗教を信じていない「世俗主義者」の動物に対する「同情」が一体化して働いているのだと言えるだろう。

第三は「予防派」で、生き物への「慈悲」や「同情・愛情」のためではなく、病気になるように体の健康状態を維持することを趣旨で菜食に切り替えた人々の属する派である。この派には、以前肉食をしていて病気になるまでで菜食に切り替えた人のほうが圧倒的に多いと思われる。近年、動物質の過剰な飲食によって恐ろしい病気が起きることが分かってきたので、周知のとおり、欧米のような肉食が主流の国々にもこの派に属する菜食者が増えつつある。

次に、実際に食べる食品をもとに、インド人菜食者をさらにいくつかのグループに分類できる。まず、牛乳や乳製品を飲食するが、それ以外の動物質は一切食べないという純菜食主義者で、じゃがいも、玉葱などの根菜さえ食べない人を含んでいるグループである。もちろん、このグループには菜食主義を厳格に守るジャイナ教徒やヒンドゥー教の最上位カーストのブラーモン人が多いが、他のカーストの人もかなり含まれている。肉や魚を食べると、汚れると言う発想も背景にあるが、生まれ変わりの教義やアヒンサ

ーの概念が基になっている。次に、卵や玉葱などを食べる菜食主義者で、このグループは数から見ると一番多い。三番目のグループは、動物の肉はだめだが、魚なら食べるという偽善的な菜食主義者で、海岸沿いのインド人、特にベンガル地方の人の間にはカーストにかかわらずこの派に属する菜食者が多い。もちろん、この地方のブラーモン人も魚介類をよく食べている。また、四足の動物の肉と魚を食べないが、鶏肉なら食べるというグループもあって、彼らは自らを菜食主義者と呼んでいる。これで、賢治による作品内の菜食者の分類とインドの実際の菜食主義者の分類がいかに似ているかが大体わかるだろう。

肉食は人間の、その動物的な本能をあおり立たせ、暴力を振るうようなものにさせる。とインド人は昔から信じてきた。そして、これもインド人が肉食から離れる一つの主な理由となつたのである。今も、この世の物質的な生活に飽きて苦行者としての隠居生活に入るインド人が、まずやることは肉食を完全に止めることである。逆にいえば、菜食は人間の心を優しくし、他の生き物に対して同情と慈悲を持つ心を作り上げ、平和的な共存共栄を可能とするという考え方をインド人は古くから抱いてきたのである。『ビヂテリアン大祭』では、「宗教的求道者」である賢治は菜食のもたらす「幸福」とはどんなものであるかを十分理解している。同時に、「科学の追求者」でもあった彼が、肉食

の利点や大切さを懷疑的に見ていることも作品から読み取れる。そして最後に、「肉食を食べるときの動物の苦痛を考えるならば到底美味しくなくなるのであります」「野菜はみんなの心を平和にし、互いに正しく愛し合うことができるのです」と、仏教の「慈悲」「輪廻転生」および動物への同情の概念を持ち出して肉食者の議論に反駁しようとしている。それで、賢治自身も実生活では、「一日ニ玄米四合ト／味噌ト少シノ野菜ヲタベ」と「雨ニモマケズ」の中に書いているように菜食に完全に切り替えることを決心して農民生活を選んだのだろう。

「すべての生物はみな無量の劫（カルパ）の昔から流転るてんに流転を重ねてきた。（略）一つのたましひはある時は人を感じる。ある時は畜生、則ち我等が呼ぶ所の動物中に生れる。ある時は天上にも生れる。その間にはいろいろの他のたましひと近づいたり離れたりする。則ち友人や恋人や兄弟や親子やである。それが互にはなれ又生を隔ててはもうお互に見知らない。無限の間には無限の組合せが可能である。だから我々のまはりの生物はみな永い間の親子兄弟である」（『ビヂテリアン大祭』）と賢治は作品の終わりに述べている。この輪廻転生の考え、つまり「生まれ変わり」の概念こそ賢治の食生活に関する世界観を形成したと言えないだろうか。そう言えるならば、それはインドにおける「宗教派」の菜食者の考え方と一致するもので、菜食主義の背景にある東洋思想の

存在の確定も可能になると思われる。

### おわりに

日本もインドも民主主義に基づいた価値観を持っているだけではなく、宗教や思想、社会や家族制度などの面においても非常に似ている側面をたくさん持っている。にもかかわらず、今までお互いに無関心の態度を持ち続けてきた。それはなぜかというところ、お互いに相手のことを知らないからである。二〇〇五年の日印首脳会談で、両国首脳は変わり行く国際秩序、国際関係の中で日本とインドがあらゆる分野において協力し合うべきことを認識し、宣言している。戦略的グローバル・パートナーシップを強化しながら、より良い日印関係を構築することは、相互の利益のために不可欠であるということ、両者とも十分に認識しているに違いない。そのため、これからの日印関係が緊密化され、両国間の技術的、政治的、経済的、外交的関係は一層深まっていくだろう。しかしその第一歩として、まず文化面での交流を一層深めなければならない。日本とインドの価値観のどこが似ているのか、またどこが違っているのか、両国民に理解してもらう方法と手段を講じて徹底的に実行することが良好な日印関係を築き上げるための前提条件とな

る。インド国民に対日親近感を育ませ、日本国民に対インド親近感を醸成させ、相互理解を深める必要性を軽視してはならない。人と人の間における交流こそが相互理解を可能にしてくれるのであり、そのために思想、文学、舞台芸術、映画などによる交流とその他の文物交流が不可欠である。つまり、人と人の間で行われる草の根レベルでの交流、芸術中心の交流、そして文物中心の交流が共に確固とした二国間関係を築き上げる基盤となるのである。

## 発表を終えて

私は2006年の8月に国際日本文化研究センターに外国人研究員として着任して以来、数回の日文研フォーラムに聴衆として参加させていただきました。発表者の誰もが自らの研究テーマを中心に講演されていたので、フォーラムでは研究者が自分の研究テーマについて話すべきものだと思っていました。それで、198回の日文研フォーラムの講演を頼まれたとき、「はい、喜んでやりましょう」と引き受けました。自分の研究テーマならば簡単で、今までの研究の成果を公開する絶好の機会だと思ったのです。そして、そのつもりで準備も始めました。しかし、「あまりにも専門的な話になると面白くなくなってしまう。聴衆の方々はそれぞれ異なる興味や関心を持っているので、たとえば、日印関係とかインドにおける日本研究などについての話を半分してから、自分の研究の紹介をしたほうがきっと面白くろう」という指摘がありました。なるほどと私も思いました。日印関係やインドにおける日本研究の現状などについて話す機会が少ないので、この場を借りて、「日印関係とインドにおける日本研究——宮沢賢治の菜食主義の思想——」について話してみようと決めました。もちろん、三つの異なるテーマをうまく組み合わせる準備するのは難しかったし、講演するの思ったほど容易ではありませんでした。しかし、講演が終わった後の聴衆の皆さんの反応をみて、やはりこのテーマを選んでよかったなと思いました。

ここでまず、カウンターパートの小松和彦教授に心から感謝の意を表します。この講演の準備中から貴重なアドバイスをいただいたし、講演後も講評のコメントをいただきました。先生の善意に満ちたコメントは、私のこれからの研究の大きな励みとなると思います。また、司会をしてくださったテモテ・カーン助教授ならびに研究協力課、図書館、情報課及びコモンルームの方々にも心からお礼を申し上げます。

*Tomomi*



日文研フォーラム開催一覧

回	年 月 日	発 表 者・テ ー マ
⑩①	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>ヤン・シゴラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p>Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-gyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都都見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩⑥	10. 6. 9	<p>Hiroshi SHIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑬	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑭	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑮	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑯	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マ リ ア・ヴ ゴ ヴ ォ デ ィ ャ チ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫①	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫②	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫③	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫④	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑤	11.12.14	X Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑥	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑦	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫⑨	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Pye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑫⑩	12. 6.13	ケネ ス シ. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィツチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑫⑪	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑫⑫	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑫⑬	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑫⑭	13. 4.10	L.I Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑫⑮	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭④①	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭④②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサキムラステイブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭④③	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭④⑦	14. 2.12	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑬⑩	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑬⑪	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボ ロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑬⑫	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑬⑬	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

⑩	15. 4. 8 (2003)	ビル ス ウ ェ ル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 鎰烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	REHEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボ イ カ エリト ツ イ ゴ バ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マ リ ア ダ ニ エ ル ズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑩⑤	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑩⑥	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亚太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9	エフゲーニー S. バ ク シ ェ エ フ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
⑩⑨	16. 5.11	コンスタンティン ノ ミ コ ス ヴ ァ ボ リ ス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

①70	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
①71	16. 7.13	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴィーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役の役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スタース Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
①77	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ… 芥川龍之介『菌車』、ストリンドベリ、そして狂気」
①78	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学研究中心専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって—」
①79	17. 4.12	ノエル ジョン ピニンガトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」



180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マク マ レ ン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブローックカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
①82	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベ ル ク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sung Hwan 魯 成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラブチュフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YOON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本言語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「『日流』の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュウ ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く—肉体表現と流光斎—」
188	18. 2.21	ウィリアム バック ブレックカー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ—江戸時代の郊外における美学的スペース—」
189	18. 3.14	サ ー レ アーデル ア ミ ン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話—日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐる—」

①90	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金 容儀 (全南大学校人文大学副教授・日文研外国人研究員) 「玄界灘を渡った鬼のイメージ—なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか—」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔 博光 (成均館大学校教授・日文研外国人研究員) 「京都と文化表象—18世紀朝鮮通信使の目から—」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉 春英 (東北師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
①93	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周 維宏 (北京日本学研究中心教授・日文研外国人研究員) 「近代化による農村の変貌とその捉え方について—中日農村を比較して—」
①94	18. 9.19	ダリア シュバンバリーテ Dalia SVAMBARYTE (リトアニア ビリニウス大学講師・日文研外国人研究員) 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐる」
①95	18.10.10	エドウィーナ パーマー Edwina PALMER (カンタベリー大学教授・日文研外国人研究員) 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」—高等教育の社会科カリキュラムを中心に—」
196	18.11.14	ヨセフ キブルツ Josef A. KYBURZ (フランス国立科学研究センター教授・日文研外国人研究員) 「お札が語る日本人の神仏信仰」
197	18.12.13	ロバート エスキルドセン Robert ESKILDSEN (日文研外国人研究員) 「異国船物語—江戸後期に描かれた船—」
①98	19. 1.16 (2007)	ブラット アブラハム ジョージ Pullattu Abraham GEORGE (ジャワハルラル ネルー大学日本語学科準教授・日文研外国人研究員) 「日印関係とインドにおける日本研究—宮沢賢治の菜食主義の思想—」
199	19. 2.13 (2007)	ステイリアノス パパアレクサンドロプロス Stylianios PAPALEXANDROPOULOS (アテネ大学神学部 準教授 国際日本文化研究センター 外国人研究員) 「日本仏教論—その思想史的展開をめぐる—」

200	19. 3.13 (2007)	<small>LU    Liu Di</small> 陸   留弟 (華東師範大学外国語学院日本語学部教授・日文研外国人研究員) 「楽しみの茶と嗜みの茶—中国から見た茶の湯文化—」
-----	--------------------	--

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。



\*\*\*\*\*

発行日 2007年4月20日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048  
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

\*\*\*\*\*

©2007 国際日本文化研究センター





■ 日時

2007年1月16日（火）

午後2時～4時

■ 会場

キャンパスプラザ京都



# 第九回 日印関係とインドにおける日本研究 富沢賢石の素食主義の思想

国際日本文化研究センター